

## 平成28年度第1回埼玉県総合教育会議議事録

### 1 開会、閉会の年月日及び時刻

平成28年5月23日（月） 午後1時30分開会

午後3時閉会

### 2 会議開催の場所

知事公館 大会議室

### 3 出席した会議の構成員の氏名

○上田清司知事

○埼玉県教育委員会

高木康夫委員長、藤崎育子委員長職務代理者、志賀周子委員長職務代理者、  
門井由之委員、関根郁夫教育長

### 4 構成員以外の出席した者の氏名

○知事部局の出席者

小林一彦総合調整幹、畠山真一総合調整幹、関口圭市総合調整幹付主幹、  
樋口悟史秘書課主幹

○教育局の出席者

柚木博教育総務部長、古川治夫県立学校部長、安原輝彦市町村支援部長、  
小澤健史教育総務部副部長、渡邊亮県立学校部副部長、松本浩市町村支援部副部長、  
藤田栄二市町村支援部副部長、佐藤裕之総務課長、岡部年男教育政策課長、  
廣川達郎財務課長、加賀谷貴彦保健体育課長、大根田頼尚義務教育指導課長、  
栗原正則総務課報道幹、飯村光良教育政策課副課長、案浦久仁子教育政策課副課長、  
高津導教育政策課主幹

### 5 会議に付議した事項

これらからの教育政策について

## 6 発言の趣旨及び発言者の氏名

○関根教育長 それでは、ただ今から平成 28 年度第 1 回埼玉県総合教育会議を開催いたします。本日は、報道機関からカメラ撮影の申込がありましたので、冒頭の撮影のあと、傍聴人の方に入場していただきます。

(傍聴人入場)

○関根教育長 本日のこの会議は「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」に基づいて設置されたものでありまして、知事と教育委員会が協議を行う会議でございます。

それでは、議事の進行につきましては、上田知事をお願いいたします。よろしく願いいたします。

### 議 事

#### これからの教育政策について

○上田知事 それでは、「これからの教育政策について」ということで意見交換を行ってまいります。

まず、関根教育長のほうから資料の説明をお願いします。

○関根教育長 初めに、資料 1 「これからの知・徳・体を伸ばす教育について」を御覧ください。

義務教育段階における「知」・「徳」・「体」を伸ばす教育につきまして、これまで実践してまいりました「教育に関する 3 つの達成目標」の取組、及び成果と課題について整理させていただきました。

一番左側、「知」についてです。学力の目標値は、県内全小・中学生を対象に実施しております「読む・書く」「計算」のペーパーテストの平均正答率としたところでございます。これは学習指導要領に基づき、「読む・書く」「計算」の観点を中心に、これだけは身に付けさせたい内容であり、基礎学力の定着を示す数値であることから選定いたしました。

指標の達成状況ですが、小学校 3 年生の正答率は、平成 27 年度 95.4%、小学校 6 年生の正答率は、平成 27 年度 95.1%、県 5 か年計画で掲げております目標値を既に達成して

おります。また、目標値には達成していませんが、中学校3年生の正答率は、平成17年度、10年前の82.0%から27年度91.7%に上昇しております。

以上の指標の状況から、「教育に関する3つの達成目標」の取組が現場に浸透し、子供たちが「知」の基礎・基本をほぼ身に付けてきていると評価できます。

一方、国が実施する全国学力・学習状況調査についてでございます。この調査では、身に付けておかなければ後の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において常に活用できるようになることが望ましい知識・技能などを中心としたA問題がございます。

このA問題の調査結果ですが、平成27年度全国学力・学習状況調査の全国順位を見ますと、小学校算数Aでは全国44位となるなど、課題がございます。

次に、「徳」についてでございます。小学校の達成状況は、平成27年度、72項目中69項目、中学校では、平成27年度、36項目中34項目に上昇しております。指標の状況から、「3つの達成目標」の取組が現場に浸透して、「徳」についても基礎・基本が身に付いていると評価できます。

また、『『いい子どもが育つ』都道府県ランキング』では、平成19年度の16位から平成25年度は全国4位まで上昇しております。全国的にも「徳」については高いレベルにあると評価できます。

次に、「体」です。評価指標の達成状況ですが、小学校は平成27年度81.3%、中学校が平成27年度84.8%になっております。こちらも「3つの達成目標」の取組が現場に浸透して、「体」についても基礎・基本が身に付いていると評価できます。

さらに体力合計点の全国順位もずっと上昇傾向にございまして、中2女子では全国3位となっております。全体的に、「体」についても高いレベルにあると評価できます。

総括いたしますと、「教育に関する3つの達成目標」の取組を通じて、子供たちの基礎・基本の定着という成果が着実に評価できるものとなっております。特に、「徳」と「体」については全国的にも高いレベルにあります。しかし、「知」については、基礎レベルでは定着しつつも、学力という点では全国順位からいっても課題がございます。

次に資料2を御覧ください。こちらは昨年度、総合教育会議において協議の上、策定していただきました「埼玉教育の振興に関する大綱」にも「一人一人が『人財』として輝けるような教育を進めていきます」と記載されております。この大綱を踏まえて、児童生徒の「知」・「徳」・「体」の基礎を身に付けさせ、一人一人が輝ける教育を進めていく必要がございます。

そのためには、「3つの達成目標」をさらに発展的な取組に構築していくことが重要でございます。

資料の一番上にあります「基礎・基本を身に付けさせる」ということに加えまして、左側の「一人一人を確実に伸ばす」、そして右側の「自らの力で人生を切り拓く力を育む」という3つを位置付けまして、この3つの観点を一体的に取り組んでいくことが重要だと考えております。

また、それらを支えるものとして、課題を抱える子供たちの支援や、優れた教職員を確保・育成する仕組みなどが必要でございます。

こうした取組により、本県のすべての市町村で子供たち一人一人を確実に伸ばすことができるようにすることが重要だと考えております。あわせて、教育に携わる者が共通の認識をもって教育に取り組む必要がございます。それから施策の進捗状況につきましても、どのように測るかということを考える必要がございます。

最後に、資料2を御覧ください。知・徳・体の基礎を確実に身に付けさせる取組から一人一人を確実に伸ばす発展的な取組にしていくことから、「教育に関する3つの達成目標」に代わる、これらの取組を包含する施策名も必要であると考えております。案1から案3のように、3つほど案を示させていただいたところでございます。

資料はこのような形になってございます。よろしくお願ひいたします。

○上田知事 それでは資料1、2を含めて、これからの知・徳・体を伸ばす教育について、どのようにしたらいいか。これまでの成果を含めて協議をしていきたいと思ひます。

まず自分のほうから少し問題提起をさせていただきます。「3つの達成目標」を通じて、知・徳・体がバランスよく伸びるよふにということ、私、就任間もない頃に、当時の稲葉教育長と、それぞれ大事なことから丁寧にやれる仕組みがないかということ、16年に小学校5校、中学校5校の10校のモデルで行い、17年から本格的にこれをやり始めました。

結果として、「徳」と「体」に関しては、それなりに答えが出てきているよふであります。着実に評価されるよふになっているのではないかというよふに思ひます。「『いい子どもが育つ』都道府県ランキング」は、文科省の学力テストに合わせて3年に1回、モラル面も含めた指標で、指標は46ぐらいでしたか。

○関根教育長 はい。これは学力以外の子供の育ちの質についてということ、学力以外は全て見ているよふです。

○上田知事 3年に1回。いわゆる日常生活のレベルだとか、例えば携帯のフィルタリングができていないかとか、地域社会でのいろんな指標ですね。そういうものに関して埼玉県全体としての取組が優れていたのに、その真ん中に22年があると思いますが、16位、7位、4位という形で上がってきています。それなのに基礎学力のチェックをしている部分が、文科省の学力テストでは逆に全国順位が低下してきていると。

各都道府県が、あるいは都道府県と一体となった市町村が、文科省の学力・学習状況調査に合わせた形でしっかりとその対策をしているのかどうか分かりませんが、そちらのほうが上がって、相対的に埼玉県が下がっているのか、この辺の分析を丁寧にしなければいけないと思いますが。

いずれにしても、高校ぐらいになってきますと、それぞれの個性をお互いに認め合うので、学力だけの価値観ではなくて、全人格的な価値観を同級生なりに認めてくれたりしますが、なかなか小・中学校だと、そこまで幅広い価値観を持った子供たちは少ないもので、どちらかという一番学力が優秀な人が1学期に学級委員長になって、2番目の人が2学期の学級委員長になって、3番目の人が3学期の学級委員長になりかねない。つまり学力で価値を見られるような時代があります。

そうした多少の学力偏重の価値観がある中で、そういう多様な価値観があるんだということばかり教師が教えたり親が教えても、現実にはそうじゃない部分があるので、やっぱり基本的には、皆さん、学力があったほうが良いと。

ただ、文科省の学力・学習の部分の埼玉県の順位が落ちていること、これもまた細かく分析しなくちゃいけないと思いますね。なぜ落ちているのか。あるいはまた学校別ではどうなのかとか、市町村別ではどうなのかとかも見て、それなりに市町村で重く受け止めていただいたりしながらですね。

やっぱり秋田県が1位、沖縄県は最下位だったということで、沖縄県の皆さんたちは秋田県に研修に行ったり、大阪府も下から2番目だったので研修に行ったりして、大阪府の伸びがよかったり、沖縄県の伸びがよかったりしていることは事実で、やっぱり何らかの形で現状を分析して、その上で対策をしているという事実があるというふうに思います。

この部分に関して、事務レベルでは文科省の全国学力テストの部分での順位の低さについて、どんなふうに分析しているかを、あらかじめ、この時点である程度言える内容があれば、ちょっと教えていただければ、少し議論の展開がしやすいのかなと思いますので、議長役の私のほうから問題提起をさせていただきたいと思います。もしできれば、やって

ください。そこまで分析していないということであれば、そういう回答をしてください。

○安原市町村支援部長 全国学テの分析ということについて、まず前提として、小学校6年生と中学校3年生というふうに、今、県学テでやっているような4年から中3まで全員というわけではない点が1点と、それから毎年受けるお子さんの対象が異なるということが前提にありますので、それを踏まえながら分析しております。

その中で、上位層、中位層、先ほど話題になっていました下位層というふうな成績の大きな層をまず見てみても、埼玉県はどちらかというところ、下位層よりも上位層のほうの伸びがやや弱いかなというのがあります。

それと市町村の規模が違いますので、62の市町村がありますけれども、市町村別というのはなかなか分析の中ではとらえどころが非常に難しいものですから、学校規模だとか、それから地域的なものというのは、なかなか分析の客観的な結果としては表れていないのですけれども、一つやっぱり気になるのは、別な面でも問題になっていましたが、無回答。回答しないというようなことが一つ特徴としては表れる面もあるのかと捉えています。

○上田知事 「無回答」というのは、どういう意味での無回答か。

○安原市町村支援部長 回答欄に回答していないものです。

○上田知事 子供たちが。

○安原市町村支援部長 はい。その率が、やや高いかなというのが挙げられております。

それから「3つの達成目標」を、ずっと県の中で実践してきた中で、いわゆる読み書きそろばんという基礎の基礎ということについては、先ほども言いましたけれども、低位層よりも上位層のほうにちょっと課題があるということですから、低位層のほうには、基礎の基礎というところは、ある程度ついていくかと思いますが、それから先の思考力だとか、全国学テで狙っている思考力とか判断力とか、そういった部分がやや弱いのかと。ここを、学校のほうで、どういうふうに授業改善していくかというのが多くの学校のテーマになっています。

いわゆる授業のあり方に今取り組んでいますけれども、小・中学校の場合、特にいろんな意見を出し合って、子供たち同士が意欲的に課題に取り組むとか、自分たちの意見を自分たちで評価し合いながら新しいものを出していくとか、他人の意見と融合させていくとか、そういったことに関係した問題というのは、やや弱いのかなというところは言える気がします。

○上田知事 なかなか、今の話だけだと議論が出てこないんだよね。だから、少し具体的

に、本当はデータをね。

これ、すごいひどい話なんだ。37位、37位、34位、44位なんていうのは。これは平均だから、市町村によっては、いいところもあれば悪いところもあるんだけど、平均で悪いわけですから。本当は一覧表ぐらいは、ここへだけは持ってきてもらって、なぜそうなのかも、分析をもっとしなくちゃいけないと思うんですよ。

そうしないと、3年前に受けた人と今度受ける人は違いますからとか、今度の県がやるものは、それだけじゃありません、ずっと追いかけていきますから大丈夫ですなんて、そういう話じゃないんだよね。

全体の集合体として、ある程度、地域性の力だとか、そんなのがあるわけなんで、強いところは強いし、弱いところは弱いし、じゃ、弱いところは、なぜ弱いのかと。その地域性がありますと。じゃ、地域性はどういう地域性なのかという形で、それは挽回可能なのか、可能じゃないのかとか、そういうのを分析して、やっぱり市町村の教育委員会に投げかけたらいと思うんですよ。

不登校の順位を投げかけることによって、全部上がってきているわけですよ。そういう順位すらも知らないわけですよ。はっきりいって、知らない人、いっぱいいますよ。今の市町村の中でも。さすがに教育長さんとか教育委員長は知らないわけではないだろうけれども、場合によっては教育委員、知らない人もいるんじゃないの。自分の市町村のレベルがどの程度か。それも分からないで教育委員会で議論したって、意味がないでしょう。執行役員が全くデータを知らないで経営会議なんかできるわけがないんだよね。知っているのは事務局だけ、知っているのは課長だけと。

やっぱり狭い目線で物を見ていると、成功するという保証はどこにもないんだよね。何のために教育委員がいるかという、違うレベルで物を見ているからこそ参考になるわけで、でなければ、こういう会議をする意味がない。こういう資料しか出さないこと自体が議論のしようがないだろうと私は思いますが、これで議論がどんどんできるというふうに思っているんだったら、かなり活発な議論ができるはずだから、どういう根拠に基づいて議論ができるか。良くするためには、裏づけを、ファクトを、事実をはっきりさせながら物事を改善していかなくちゃいけないからね。そういうものが本当に出されているかどうか。

全体の教育理念は教育大綱の中でもう出しているわけだから、「これからの知・徳・体を伸ばす教育についての効果検証」と、こういうタイトルまで出ているわけだから。「徳」と

「体」はいいとして、「知」を上げるための案というのはどうするつもりなのか。事務方的に言ってください、どうしたら上がるのか。

○安原市町村支援部長 まず1点目は、昨年度、こういった重い結果が出ましたから、各市町村に、今、御心配のとおり、各種の結果が出た後のデータと分析の観点とといいますか、そういうものを持ち寄って62の市町村を全部回りました。

その説明をさせていただいて、一つは、出された問題の正答だけでなく、間違っただけを選んだ中の誤答の部分まで踏み込んで分析していただく。同じ間違っただけの答えでも、どうしてこういう答えを選んだかとか、あるいはなぜ回答しなかったのかとか、そういったところまで、各学校できちんと分析するように指導してもらうようお願いしてあります。

それと、各学校の授業をもう一回見直して、日ごろの授業のあり方と学力とのかかわりはどうなのか。それから、もうちょっと踏み込んで、例えば学習した内容の定着はどうなのかと。

○上田知事 そういうのはどこにあるのか。

○安原市町村支援部長 すみません、今、それを去年、そういったことでこれから、いわゆる今年度の、この前、4月に終わったものも含めて、今時点ではないのですが、出していこうと思っております。

○上田知事 例えば市町村から、特にひどかったところから事情聴取だとか、課題分析だとかというのは、もう出されて集約しているとか、そういうのはあるのかな。

○松本市町村支援部副部長 市町村支援部の松本と申します。

それぞれの市町村に分析をしてもらいました。その中で、意欲的な部分に原因があるとか、あるいは経済的な部分に原因があるとか、あるいは子供たちの生活環境に原因があるとか、それぞれの市町村で、その原因を分析してもらいまして、そしてその原因を解決するための手立てを県のほうでメニューとして用意をして、とにかくその原因を解決するためにやってほしいということで、昨年中にスタートをいたしました。

具体的には、経済的に貧困層が多いというふうなところには、それなりの対応をして解決を図る。あるいは中位層の意欲を上げることによって学校全体の意欲化を図る、それを狙っている学校にはそういうメニューを。今、2つ例を挙げましたけれども、そういったことで県のほうでは事業を組んでやっているところでございます。

○上田知事 ちょっとデータのペーパーがなくて、事務方的にいろんな努力はしています



というお話があったんですが、こういう中で議論ができるかどうか分かりませんが、たまたま私は「知」に絞った話をさせていただきましたが、知・徳・体、4位だからいいというわけでもありませんし、できれば1位のほうがいいし、体力もないよりあったほうがいいと思います。あるいは「3つの達成目標」との絡みの中での今後のあり方について、それぞれの委員から御提案等々ありましたら、どうぞ。

まずは、皮切りに委員長のほうから。

○高木委員長 今、知事から、「知」の部分で数字の不備を御指摘いただきましたが、私もその辺は非常に心配しているところでありまして、つい先日、1都9県で教育委員の全体が集まる会議が開催されました。埼玉県が主催だったわけでありすけれども、その中でも、やはりそれぞれの都県において学力の差が表れている、特に、例えば同じ埼玉県の中でも市町村によって違うところがあるというのは認識しているのですが、なかなかその辺が各市町村の教育委員会、また市町村の首長さんの間で情報が共有されているかという、そうではないんだなというのは感じております。

今の知事の御指摘のとおり、これから義務教育課程の教育委員会と県の教育委員会一体となって、これからの子供たちを伸ばしていかないと、特に県立高校に上がってくる子供たちは義務教育課程を通過してくるわけですので、その子供たちがどういう将来を目指すのかということも、小学校・中学校時代から、学校で考える力を付けていただかないと、自分の望む進路さえ見つからなくなってしまうのではないかなというのは危惧をしております。

この中の数字を見ましても、全国で少なくとももっと上位に上がってくる、埼玉県はそれだけの實力は持っているんだというふうに私は信じているんですけれども、それをどこで伸ばすかと思うと、現場のほうが、それを意識しないとできないのではないかなと、改めて今、知事のお言葉を聞きながら感じたわけでありまして。

それには、やはり子供たちも、首長さんも教育委員会も自覚を持つことも大事ですけれども、やっぱり先生が自覚していただかないことには。先生が、果たしてどこまで自分たちの子供の学力が伸びているか、もしくは全体の中でどの位置にあるかということ把握しているんだろうかということ、ちょっと心配しているところです。

ぜひ、この辺も県と市町村、教育委員会一体となって取り組まなければいけないのではないかなというふうに感じています。私、教育委員会に入りまして、県は、県立高校であったり県立中学までは、かなり直接的に関与ができるのでありますけれども、義務教育課

程に関しては、全く、指導助言という立場は県の教育局のほうもお持ちになっているようではありますが、なかなか具体的な部分にまでは入っていけないのが現状ではないかなと思っています。

しかし、そこに及ばないと、知・徳・体のうちの「知」の部分、学力については、伸ばしていくことも難しいのではないかと感じていますので、今後、この総合教育会議の中で、こういった話題をテーマにさせていただいて、できれば何らかの方法、方策を考えていきたいなと思っています。「知」のほうは、そのように考えているところでございます。

あと、先ほど申し上げましたが、指導者の能力、先生の自覚を、もちろんされていると思うんですけども、さらに意識を持ってもらいたいなど。先ほど首長さんが成績を知っているんだろうかというお話がありましたけれども、なかなか十分、そこまで把握をされていない自治体が多いのではないかなと。これは個人の首長さんと意見を交わしたわけではないのですけれども、何名かのお話を聞く中では、そんな印象を持ったのも事実であります。私のほうから、今の件でお話ししました。

○上田知事 では御意見があれば、どうぞ。

○藤崎委員 まず1点目、不登校の子供に長らくかかわった者として、埼玉県で、これはいいなと実感しているものは、実は体力です。子供たち、例えば中学校を休んでいた子供たちが、例えばこの高校に行くぞと目標を定め勉強すると学力というのは急激に上がるんですね。それには本人の努力はもちろん担任の先生の努力であったり、相談員のサポートであったり、いろいろあるのですが、ところが大体その途中で、体力がない子が脱落してしまったりするわけです。

私が子供たちに、大事なものは体力だと言うと、「えっ、何で知力じゃないの、学力じゃないの」とみんなが意外な顔をします。目標が決まり、体力があれば頑張り切ることができるから、そう言う子供たちは納得してくれます。体力合計点の全国順位が、埼玉県はもとも良かったわけですが、さらに良くなっていることを、誇りに思っていないのではないかと思います。

ただ、知力に関して、やはり委員長と視点は全く同じで、学校の先生に関して感じるころがあります。あまり他県のことを申し上げるのとは思いますが、実は以前、秋田に視察に行かせていただいた時に、何が違うのだろうと、それが一番知りたかったんですね。そうしましたら、まず校舎のきれいさ、掃除の徹底ぶり、それから給食のおいしさ。これは埼玉県でもおいしい給食はあると思うのですけれども、何よりも、先生方の表情が生

き生きしてすばらしかったということなのです。

今日、私は、この会議に際して、知事にぜひお尋ねしようと思って来たことがあります。それは、いい先生を採用するにはどうしたらいいか。日ごろ、県の職員の採用などにおいても、もっと工夫ができるのではないか、もし何かお考えがありましたらぜひお聞きしたいなと思って来ました。

それから現場に赴いても、委員長が全ての先生に名刺をお渡しして挨拶をするということを率先していき、教育委員一同、それを実践していますが、まだまだ先生の中で名刺を持っていらっしゃる方が少ないです。

新入社員になったときに名刺をもらって、とても嬉しかった、その会社で頑張ろうという気持ちが芽生えたなんていうニュースを見るにつけ、やはり学校の先生にも、そういった一般的なことも大事なのではないかと思います。

そして、気になるのが体罰ですとか、また、わいせつな事件等教員の不祥事などがなくなるということですが、それを取り締まるというよりは、もともと子供が好きで、子供を伸ばそうと思って情熱を持った先生方のうち一部ですが、10年、20年経つうちに、免許状更新講習も嫌とか、自ら学ぶことが楽しくなくなって、子供とかかわることが薄くなっているのではないかということを感じまして、では、いい先生を採用し育てるに当たって、どのようなお考えをお持ちなのかなというように思った次第です。以上です。

○上田知事 そうですね。関根教育長、採用については、名刺を持ちたがらないというのは、匿名性を大事にしたがっているのですかね。要は責任を、いざというときに取りたくないというような気持ちがあるんですかね、そういう人たちは。

○関根教育長 いえ、そんなことはないと思います。

○上田知事 そんなことはないですか。

○関根教育長 ないですね。そうではなくて、教員の場合、外部と接触する、名刺を出す機会があまりないですね。ほとんど教員同士ですから、部活動の大会に行っても、ほぼ教員で知っている顔ばかりですから、名刺を使うという場面が少ないです。名刺を使うという場面の教員は名刺を持っています。学校でも作っています。

○上田知事 最小限でも親がいるじゃないですか。

○関根教育長 親に名刺を渡すという習慣はありません。

○上田知事 最近では、どちらかというと親が関与する人が多いから、親に会う確率は高いんじゃないですか。

○関根教育長 親に会う機会があります。

○上田知事 それから、いろんな意味での社会的な地域との絡みだとか、学校応援団だとか、いろんな形でそういうことが要求されているときに、普通は必要じゃないですかね。

○関根教育長 一般的に、そういう機会が少ないというのは確かにあると思います。ただ、だんだんと今はそういった形で名刺を作って持つという先生が増えていることは確かだと思います。しかし、全員が持つという風土が今までなかったというのは確かだと思います。

○上田知事 名刺の消化の悪い人は課題があるんじゃないですか。付き合いが悪いとか。

○関根教育長 名刺を出すような場面に出ていないという面はあります。

○上田知事 学校と自宅を往復しているような人は、ろくな人はいないんじゃないですか。

○関根教育長 そう言われてしまうと、私も教員だったので反論したいんですけども。正直言って、部活動を一生懸命やったり、本当に授業研究をやったり、クラス経営を一生懸命やるという面で全力を尽くしていますから。

○上田知事 たまには同窓会で、「おまえ、どこにいるんだ」「ここにいるんだ」といって名刺交換しながら、いろんな話を聞くことで幅も広がるし、そういういろんな活動をする中で幅も広がるわけで、それが必ず人間の持つ幅というものを鍛えていくと思うんですよね。

私は正直いって県庁のメンバー、県庁と自宅を往復している人にはろくな人はいないと、そういう認識をしていると言っています。それほど幅が狭いかと。それほど人と付き合いがないのかと。そういうので本当のアイデアが出るだろうか。いい施策が出てくるだろうか。あるいは窓口でいい対応ができるだろうか、そういうふうに思っていますね。窓口で、法令どおり、手続どおりといったら、どうかすると不愉快にしているんじゃないか。やっぱりキャパを広く持った人ほど、多くの子供たちは多様性があるわけですから、その多様性にいろんな反応ができるわけですね。学生のときから、そういうことがよくできている人ほど、いい教師になり得る可能性は高いと思うんです。また入ってからも、そういうことをすれば、なお、いいと思うんですけども、採用試験で頑張って、マニュアルで何とか面接を通過して、後はまた根暗の人間に戻ったなんていうのはね。

もう、はっきり言われましたからね。挨拶運動、1年ぐらいたって、昼飯時にある部長と会って「相変わらず挨拶できないな」と私が言ったら、「役人は暗いですから、根暗ですから」と言ったよね。「どうして根暗の人が採用試験に合格したんだ」と言ったら、「ああ、そうでした」と。ともかく名刺が必要としていないというのは、それは問題だと思ってい

ます。

それから採用については、県庁などと同じように、面接は現にいらっしゃる先生たちがするんですか。面接官は誰がするんですか。

○関根教育長 面接は現場の校長・教頭も含め、民間の方も入ってもらっています。

○上田知事 入ったりするんですか、面接試験で。

○関根教育長 はい。こちらの教育局の者も入るとか、いろいろなパターンでやっております。

○上田知事 なかなか、マニュアル化されているから、みんなうまいんだよ。そういうのはよく聞きますね、民間の人事担当の人たちからもね。なかなか採用は難しいと思います。結婚されて、よくなる人もいれば、悪くなる人もいたり、いろいろな人間が変わったりします。

そんなところでお答えの方はいいでしょうか。

○藤崎委員 よろしいですか。名刺の件で口火を切ったのですが、私自身も、名刺を持たずに、でも部活や授業に熱心ないい先生をたくさん知っております。ですから、確かに持たない風土というのが今まであったということは実感しているのですが、例えばお祭りだったり、あるいは子供の将来の就職先を考えた時に、地域の方々と交流したり、いろいろ考えていきますと、やっぱり名刺を印刷して、この学校の教員であるということを堂々と言っていたきたいなという思いがあります。

名刺ということに拘りすぎてもいけないと考えますが、やっぱり先生が輝いていれば、その子供たちも、あの先生の生徒だからと町の人も見てくれますし、また子供も、こんな大人になりたいと思うわけですね。ですから、名刺をサッと差し出す姿というのはとても大事なんじゃないかと。

また海外を見ていると、ホームページに教員の名前と写真が出たりしています。日本では非常に個人情報保護ということが強くなっています。先生方には学校の教師としてもっと誇りをもって活躍していただきたいという思いも込めて名刺のお話をさせていただきました。

○上田知事 危機管理上も名刺が必要な時がないでしょうかね。具体例を申し上げますと、子供が車にはねられた。すぐ現場に急行して、学校のすぐそばだったから、担任の先生がパッと電話しながら、子供たちがいるので自分も教室に戻らなくちゃいけないんだけど、救急車が来て、名刺を渡して、すぐ追いかけて何らかの形で連絡しますから、よろし

くお願いしますと。私はこの子の担任ですと。そのときにメモするより名刺を出したほうが早いというのはあるかもしれません。

いざという時にどうするのか、そういう危機管理上の問題もあるんじゃないかなと思います。連絡先としてパッと渡す。そうすることで、次の行動がしやすくなるわけですね。あると思いますね。事故の加害者になった場合とかもですね。今はちょっと申しわけありません、責任持って弁償します、これが私の連絡先です。おたくさまの連絡先をいただけませんかとか、加害者と被害者の名刺を交換することで身分の確認をして、分かったと。お急ぎのようだから行ってくださいとか、そういう話もできるかもしれませんし。危機管理上、必要があるものではないかなと思いますけれどもね。

○関根教育長 その辺、教育委員の皆さんのお話もありますので、私も名刺はいろいろな面で活用できると思います。例えば保護者については、今お話がありましたが、私も現場のときには名刺の裏にいろいろな言葉を書いていきました。校長のときには80何種類ありましたが、ちょっと名刺に工夫することによって、例えば親御さんへのメッセージになったりします。

今までそういう文化があまりなかったのは確かですが、名刺一つとっても、藤崎委員が言われるように、名刺を新人が持つことによって、やはり社会人になったというプライドを持てる一つの材料かもしれません。

確かに今までいろいろな営業に行ったりしてということがあまりないですから、どうしても学校で授業をやって、クラスのことをやって、部活やってとか、学校からなかなか出ないところがありました。しかし、知事がおっしゃるように、危機管理上も、確かに何かあった時に、自分はこういう者ですというのを出せるというのは大きいですし、これからは学校もいろいろな社会の方々、地域の方々と交流していくという場面が増えていきますから、そういった意味では、名刺を持たせる、持つというのは大事だと思いますので、うまくどのようにできるか検討していきたいと思います。

○上田知事 1950年までは、ほぼ先生は絶対だったですから、大卒だとか、師範学校卒業の大先生ですから、圧倒的な上位の人でありますから、名刺も要らない。「先生です」と、これだけで「あ、先生」と通用したんです。みんなも言うことを聞いてくれたし、一定程度の国家的な価値観みたいなものもあって、それを受容するのが国民みたいなところもありましたのでね。

新しい戦後の世界、1945年以降は、そういうものではなくて、やっぱり多様性の社会で

もありますし、一人一人の自由だとか権利だとか、そういうものも言われていますし、また親も、そして子供たちのレベルが高いし、ある意味では社会人としての最小限度のマナーというのが必要になってくるんじゃないか。

1950年までぐらいの雰囲気、それから65年たった今でも残っているというのだったら、それは問題じゃないでしょうかね。シーラカンスの時代みたいになって、それはやっぱり課題があるんじゃないでしょうか。もともとととっても、それは60年前の話でしょうと言いたいですよ。

○高木委員長 今、名刺の話で、私が教育委員、皆さんと一緒にになった時に、やはり学校の先生が名刺を持っていないのに最初驚いたんですね。これからの子供は、絶対に地域が育てなきゃいけないと、ずっと思い込んで教育委員をやっています。

これはある例なんです、ある小さな小学校がありまして、地元なんですけれども、そこは交通安全から地域の安全まで、駐在さんが中心になってやっている町、学校があるんですね。そこの方たちは家族全員が知っている。児童も80人ぐらいしかいないんですけれども、顔も分かるし、名前も分かるしという一つのコミュニティなのですが、やはり学校というのは、そういうのが理想かなといつも思うんですね。

ところが、いろいろなところの学校にお邪魔すると、先生方は非常に熱心に子供たちを指導していただいているんですが、今度は地域から見た場合には、先生がすごい遠い位置にあるんですね。先生に地域に出てきてほしいと思うがゆえに、行った先では、みんなで名刺交換しましょうというのが、この委員会で中心になって動いているんですけれども、先生も一歩踏み出してもらおう。出てこれなくても、一歩出ようという気持ちを伝えるのに名刺が一番有効なんじゃないかなと。

例えば保護者が名刺交換していただいたとして、自宅へ帰った時に、あの先生に相談してみようと思った時に、その名刺があるだけでも違いますし、何か地域教育を繋げるものは、一歩出る姿勢というんですか。そういうものを持ってもらいたいというのが思いなんですね。

皆さんもちろん、学校の先生、一生懸命やられているんですけれども、一歩出ようというのを中心に訴えられたらいいなと思っています。すみません、口を挟みました。

○上田知事 名刺論議から、いろいろ議論が出てきましたが、学校の現場では、60年前の古い体質が残っているということがよく分かりました。名刺持たずに生活ができるという、本当はそうじゃないはずだと私は思っておりますが、それでも通用するというのが、ある

意味では、上位概念のない、みんなが平らで平等だという世界だと思いますので、なかなか上位概念のある人たちは指導がしにくいという問題もあるのかもしれません。教師の世界はですね。

何か、教頭や校長は、教員の指導者というよりは、地域社会の窓口になれとか、親の窓口になってくれればいいんだと。教員のほうにかかわるな、学習指導にかかわるなと言わんばかりの空気があるという話も聞いたことがあります。学校長の方ですね。

そういうのも教育改革の一つじゃないかな。いろんなことを経験した教頭や校長が、学習指導に関しても口を挟んだり何らかの形で関与していくというのは大事なことだと思うし、そういうものを甘受して、先輩の話なんかを素直に受けとめていく、そういう文化がないとよくないんじゃないでしょうかね。全く違う世界にいらっしゃいますよと、同じ学校だけれども、こっちはこっちじゃなくて、交流ができるようにしないといけないんじゃないかなと思いますけれどもね。この辺なんかは率直にいつてどうなんでしょうか、経験上。

○関根教育長 学校はかなり変わってきています。というのは、教員評価が入ってきたから、校長は必ず授業を見ています。そういう意味では、授業を見て、授業の講評をしますし、今はかなりの学校で校長がペーパーを作って渡したりしています。

以前なら何もなかったですね。この辺は20年前とはまるで変わりました。この10年でも相当変わってきていると思います。

○上田知事 そうですか。

○関根教育長 授業を校長は必ず全員見ます。また、授業後の講評もする。教員評価もする仕組みになっていますから、面談もするという形でやっています。

以前は、20年ぐらい前ですと、授業を校長が見るだけで拒否、拒絶反応がありましたが、今は全くなくなりました。その辺は、今一番大きく変わってきていると思います。

○上田知事 メールなんかで直接、私のところに直訴されるようなものに関しては、やっぱり問題教師も、そのときの校長や教頭さんたちがあまり関与していないことが結構ありますね。だから、また問題を起こす。何回か繰り返すもので、直訴する。1回ぐらいだったら来ないんですよ。これはまた逆に言うと、校長さんとか教頭さんとかにも課題があったりするのかもしれません。どこだって、そういうのはあると思いますけれども、どこまで鍛えられるのかというのがあるかもしれません。

いずれにしても、どんなにマニュアルができ上がっているファミリーレストランでも、



店長次第で中身は全然変わりますから。サービスの中身が変わったり、配膳の時間も全然変わってきますし、まさに店長の力量みたいなものがありますし、同じ保険の外務員がメンバーなんですけど、すぐれた支店長さん、支社長とかが入ったりすると、私が知っている人で、行くところ行くところ必ず日本一になっちゃうという支社長がいましたけれども、メンバーは同じなんですよね。だから、その人のまさにガバナンスとかリーダーシップなんですよね。

そういうがあるので、なかなかつらいところですが、やっぱり教師も子供以上に学んだり、鍛えられたり、鍛えたりしなくちゃいけないということなんですよね。そういう仕組みを、我々はどうかすると子供たちのことだけ考えているんですけども、あまり指導者をどう鍛えるかとか、どうするかというのはあまりないですね。

○関根教育長 我々とすると、そこは一番考えてはいます。例えば今、小・中学校でも学び合いの授業というのをかなりやっていますけれども、やはり教員が学び合わないと。自分が学び合っていないで、子供たちだけ学び合わせる授業をするというのは矛盾を起しますから、結局はうまくやれません。どうやって教員が学び合っていくかが、教師の職務なのではないかと思えます。県立学校でもそういう意味で、学校間ピアレビューというのを入れたのですが、学校同士で学び合いのスタイルというのを今入れております。

○上田知事 子供たちの評価は出てくるのですけれども、学校の教師の評価というのは出てこないじゃないですか、未だに。全国的に出たりしないじゃないですか。そういう意味では、ちょっと不思議だなというふうに、ふと思いました。

○関根教育長 学校の教員のテストがあれば、また別なのでしょうけれども。

○上田知事 よくできる、指導力抜群の教師、県の順位とか何かそういうのがあってもいいのかもしれないですね。そうすると、うちの県は最下位だなんていって、もうちょっと教師の指導カリキュラムをもうちょっと何とかしなきゃいかんとか、いろいろ考えるのかもしれないですね。

ちょっと論外になってすみません。いかがでしょうか。どうぞ。

○志賀委員 私は親の視点で、ちょっと「知」のところに関してお話しさせていただきますが、やはり低学年から小学校の年齢が低い層というのは、子供たちをその気にさせて、ある程度、勉強の方に向けるというのは意外と簡単だと私は思っているんですね。子供のやる気を引き出していくというのは、小さい頃から低学年は、保護者と先生方のやりようによっては、いくらでもやる気を伸ばすことはできると思うのですが、中学生ぐらいにな

って、やはり思春期に入ってくると、非常に…。

思春期の頃というのは、自分とは何かとか、自分は何のために勉強するかというのをすごく考える頃でもあるので、この頃というのは、親や先生がやれやれと言ってやるものではないというふうに思います。

やはり幼い頃からのかかわりというのはすごく大事だと思うのですが、今、私が非常に気になっているのは、先生はちょっと分からないですが、親も非常に子供たちに、点数がこれだけ取れたら何を与えるというようなやり方で指導しているというのが、とても私の中では気になっているのです。今度、何番以内に入ればスマホを買ってあげるからとか、そういった保護者も非常に多いのは、私の中では感じています。

子供が誰のために勉強しているのか。あくまで自分のために勉強して伸びようとしているのか、それから親のために、親に言われるから、何かをもらいたいからやるのか。子供たちの意識といいますか、これは結局、幼い頃からの親子のかかわりや先生とのかかわりもすべてを含めて、環境というものが、必ずしも成績をとったら何かをもらえるとこのではなくて、自分のために頑張れる、自分のためにやろうという気持ちを引き出していき、そういった過程がすごく必要なのではないかなということを感じているんです。

これは親の視点というか、周りの親とかかかわっていて、非常に熱心な親はすごくいるのです。ただ、熱心な親ほど、中学になっても、高校になっても、勉強のやり方を結構つきっきりで教えている親も多いです。子供たちは自分で考えて、やる気をもって、自分で考えて分からないものも時間をかけて解いて、その喜びというものを感じて、また次をやろうと思うんだと思うのですが、意外と高校生でも、親がついて、徹底的に一緒になって勉強しているということも意外と多い家庭もあります。

ただ、それがずっと続けられるかということ、子供はどこかで自分で喜びを感じて、やる気を引き出してもらわないと、その上に、目標に繋がれないのではないかなということを感じているんですね。

私、今、家庭地域連携課さんと家庭教育振興協会というのに入っていて、昨日もそちらの総会があって、いろんな先生方と結構お話をさせていただいて、先生たちも、やっぱり子供たちがやりたい、頑張りたい、知りたいという気持ちを伸ばしてあげるのがすごく大事なんだと。

家庭地域連携課さんのほうも、「知りたがりっ子」を育てようというようなプログラムを出していただいたんですけども、知りたがりっ子というのが、実は今すごく少ないかな

と。さっきお話で、無回答が多いということをおっしゃっていましたが、無回答というのは、分からない、どうせ書いても仕方がないとか。私は、分からなくても、何かしら書けば点数取れるんじゃないかとか思ったりしたのですが、無回答といったことも考えると、若干、やる気といいますか、子供の何かおもしろいなとか、何かやってみたいなとか、頑張りたいなという意識が何となく削がれているのではないかと思います。

それが家庭なのか、学校教育なのか、全てなのか、分かりませんが、教育というのは、大学の目標じゃなくて、その先をもっと見てほしいと思うのですね。そこに繋げるためには、学校と、家庭と、地域の人たち、いろんな人たちと何かの体験をすることで、やる気を引っ張っていけるような環境、意識というものが必要なんじゃないかなというふうな、本当に漠然となんですけれども、感じています。

○門井委員 先ほど委員長から、先週、1都9県の教育委員の教育会議がありましたというお話がありましたが、私は「魅力ある学校づくり」ということで分科会の座長をやりましたが、各県の状況を聞く機会がなかったので、東京をはじめ各県の委員さんのお話を伺い参考になりました。各都県とも基本的な認識はほとんど一致していました。

一番、各委員さんが気にされていたのは、子供が多様化していると。県の教育委員の方ですので、県立高校を頭に入れているんですけれども、ほとんど100%近い子供さんが高校へ上がってくる。そうすると、その学力も、家庭の状況も、すべて違うんだけれども、やはり同じような教育を与えている。どうも子供の多様化に、うまくマッチしていないんじゃないかと。

そういう子供の多様化にうまくマッチするような学校を作っていないと、これからはというお話なんですけれども、そういう点からして、先ほど来の全国学テの成績の問題も含めて、いろいろあるんだろうなという感じがしています。埼玉県で始めた県学調については、私が教育委員にさせてもらう前に、こういうことをやろうということで決まっていたんですけれども、これを決めたのはすごいことだと本当に思っています。

というのは、義務教育の頃からしっかりと、一人一人の力を把握して、そしてその中で学校の先生も含めて、どうやって子供たちを成長させていくか。どうやって将来、知事さんのおっしゃる、自らの力で人生を切り拓き稼ぐ力を与えるかというのをやるための、非常にすごい取組だなというふうに感じています。

ですから、始まったばかりの県学調については、最初が非常に大事なので、これを軌道にしっかりと乗せていけば、全国学テも上がるんじゃないかなと、そういうふうに思っ

いるところなのですけれども。

○上田知事 一人一人をずっと追っかけていくという試みではなくて、平均値的なものを追っかけるというのが世の中のデータですから、一人一人の伸びを追いかけるというのは、なかなか厄介なことなのでやらない。それをやるというのですから、これは画期的なこと、すごいことだというふうに思います。

ただ、一人一人の伸びだけを気にしていると、一番低い人がちょっと伸びた、よかったねと。それも一ついいんですが、全体値としてどうなのかということであると、こういうことが結果として出ているので、その辺をどう引き上げるかということに関して言えば、なかなか県教育委員会という形では責任が持てないですよ。

じゃ、どう関与するのかということに関して議論をしておかなくちゃいけないと思うんですね。小・中学校は県の教育委員会の欄外ですと。県は関与もできないし、市町村の主体性に任せるしかない、こんなふうに思っているのかどうか。

私は県立高校の退学を気にしました。気にして、それなりの施策を打っていくと答えが出てきました。途中で気付きました。待てよと。中学生の不登校は高校で中退になりやすい。高校の中退を防ぐためには、中学生の不登校の実態を確認しなくちゃいけないと思って一覧表を作ってみたら、それこそ一番ひどいところは100人のうち7.6人不登校だと。一番いいところはゼロだと。埼玉県は全国平均で8番目に悪い。今、いいほうから7番目まで上がってきた。

それは、なぜ可能になったのかというと、県が「あせえ、こうせえ」と言ったことはほとんどないわけですね。ただ、ファクトを送りつけているだけなんです。47都道府県の埼玉県の順位、63市町村の順位を送り届けて、皆さんがそれを見ると、おのずから、気の利いた人は、何とかしなくちゃと。

だから63市町村の教育委員会に、私たちは指示もできなければ命令もできないという事実があるんですが、しかし知・徳・体に関しても、どちらかというと小・中学生の間にでき上がっちゃうというところもあるんですよ、現実には。その上で、高校ぐらいになったら、自主的に判断する力もあるので、より勉強したい人、あるいはいろいろな資格取得をしたい人、いろいろ選択肢を広げた上で、それに適切なアドバイスをしていく。そういうことが私たちの課題だと思うんです。

しかし、現実にはそこに上がってくるまでに、もう疲れ切っておるとか、およそ高校生なのに小学校3年生ぐらいの分数とか少数の概念も知らない。小学校6年までに終えて

おこなきゃいけない漢字も読み書きできない、そういう子だっているわけですね。

それをブロックするには、こういうことが望ましいということ由市町村に何らかの形でインパクトを与えていかなきゃいけない。しかも現実には、全国の学力・学習状況調査の順位が下位レベルだと。悪くなっているわけですね。私の記憶だと、大体、真ん中ぐらいだったんですけども、いつの間にか下位になっちゃった。どうもおかしいなと。「3つの達成目標」で、それなりに充実させてきたつもりなのに、「徳」と「体」はうまくいっているのに「知」だけうまくいっていない。

何なのかということ、やっぱりしっかり分析して、その上で市町村に何らかのファクトを与えながら、事実をよく知っていただいて、その事実に基づいて改善をしていただく、そういう作業を求めるのが、結果的には資料2になってくる。そういう基礎的なものを重点化しながらも、県が進める一人一人の伸び、そういうものを確認しながら、結果的にはレベルをアップさせていって、なおかつ志を持った、そして社会に活躍できるような子供たちになってもらうというストーリーに繋げなくちゃいけないと思うんですね。

問題は、この小・中学校の、「徳」がこれでいいとか、「体」がこれでいいとは言いませんが、これは順調にしているということ的前提にすれば、あれもこれもとっているとなかなかできないので、「知」の部分の小・中学校でどこまでやっていただけるかということに力点を置いた形で、どういふサジェスション、我々がどういふアプローチをすれば、結果的に市町村教育委員会が中身を変えていくのか。

それも圧力だとか、お節介だとか、そんなことを感じさせないで、素直に「えっ、これはひどい、じゃ頑張るしかないね」という気分にして、実は不登校対策は皆さんがやれるんだと。こんなにひどかったんだと。やっぱり上位のところは、びっくり仰天されていたわけですね。その証拠に、上位の1位、2位のところは、次の年に半減しましたから。

私が事情聴取したところによれば、セオリーどおり、校長会議を開く。担任の先生が家庭訪問をする。子供たちに誘ってもらう。そういうので大体半分は学校に通い始める。あとの半分はいろいろな課題があるので、簡単ではない。でも、簡単な部分の2分の1でも、何らかの形で学校に復帰するというのは、多分、子供にとってはいいことだというふうに思いますし、また対象者が減れば、その人に特化して、特定の対策が取れると思いますので、いいと思いますね。

問題は、どうすればこういうことが可能なのか。不登校対策みたいに、ファクトを知って、なおかつ、それぞれの市町村が問題意識をもって、何らかの形で欠点のカバーをし始

めるという、この部分をやっておかないと、低いレベルでの伸びしかないのかもしれない。

県でやる一人一人の伸びが、確かに伸びた。しかし100点満点で5点が8点だったと。じゃ8点でいいかという、それは困る。5点よりはましだけど、やっぱりそこは市町村教育委員会で、5点のやつを一気に70点ぐらいにさせていただくような改善をやっていただく。多くのことは大体分かる、そういうことをやってもらわなくちゃいけないと思うんですね。

それをするにはどうすればいいですかね、教育長。

○関根教育長 「3つの達成目標」の総括の中で、これはかなりよかったと思います。市町村の小・中学校では「3つの達成目標」を「3達」と言って、みんなで合言葉の中で徹底していこうということで、やってきた成果が、間違いなく徳・体には出てきている。

しかし、全国学テを分析した結果、「知」についての基礎・基本だけ95%目標値でやってきましたが、中から上位の人が伸ばせていなかったと思います。そういう反省から、県学調を始めて、一人一人全員を伸ばしましょうということで、今、動いています。

ですから、部長や副部長からお話ししましたが、去年、特にこの成績でしたから、大変ショックを受けました。具体的には、特に普段の授業の時の定着とか、单元ごととか、いろいろなところで定着を確実にやってくださいということをお願いしてきました。

今までも、公表はされていませんが、各市町村で全県の中でどれだけの順位であるとか、どのくらいの成績だということは分かっているはずです。データは行っています。ただ、今度はそれに加えて、ちゃんとやって伸ばせましたかということが分かるんですね。

つまり、伸びたか伸びないかというのは、やったかやらないかですから、これは今までと違って、地域的な状況だとか、いろいろな状況だとかという言い訳ができません。逆に今まで低かったところには伸びしろが多いわけですから、伸ばせるだけの余地があるのにもかかわらず伸ばせていないとすれば、これは大きな問題として提起できます。

そういった意味で今回の、一人一人を伸ばす、伸びが見えてくるということは、また今までと違った、伸ばせました、伸ばせません、どの程度伸ばしたかということが市町村ごとに分かってきます。その点では、そういうデータを示しつつ、知事の言われた全体の成果を示すということでは、全体的に伸びていなかった、それも大した伸びではなかったから問題というのですか、低いままでは大したことはありませんから、全体的な指標と、個々の一人一人を伸ばしているかという指標、その2つについて、市町村の方にそういうデー

タ提供をしながら、では、どうしたらいいんでしょう、ちゃんとやっていますかということが、こちらも問うていけるのかなと思います。

やはり子供たち一人一人の力、学力も含めて生きる力というものをちゃんと保証してあげないと、これからの社会、これからの時代は、生きていくのは非常に大変ですので、その責任は我々にはあります。そのために県としては、こういう指標を設けて、やっていないところは、本当にやっているんですかということ、知事の言われるとおり、一度言っていないといけない。「やれ」とは言えませんが、「やっているんですか」と問うことはできると思います。

子供たちに力を付けてあげるということを前提に、そういう風土を作っていきたい。また、その風土を作るために、今まで「3つの達成目標」とやってきましたが、達成目標という意味で、低い意味での一人一人の達成目標では「知」については効果がなかったことは明らかです。どういうキャッチフレーズをとって全県を盛り上げたらいいかという点でも、いろんなアイデアをいただければありがたいなと思っております。

○上田知事 俗に言う、読み書きそろばんのペーパーテストの平均正答率を上げる。試みでは成功しているけれども、それが応用力のないものだったと。つまり、計算のやり方を教えていたり、読み方を教えていたり、書き方を教えているだけで、何のために読んでいるのか、何のために書いているのか、何のために計算しているのかが教えられていないから、その次の問題が全く分からなくなるわけですね。やっぱり、アプローチが少しどこかに課題があるのかもしれないから、このアプローチを考えなくちゃいけないですね。

「 $1 + 1 = 2$ 」になるんだと。なぜ2になるんだということが分からないと駄目なんですよね。なぜ「 $\frac{1}{3} \times \frac{1}{3} = \frac{1}{9}$ 」になるんだと。なるからなるんだじゃ駄目で、なぜなるんだというところを教えておかないと、次がないんですよ。やっぱり、どこかそういう部分があるのかもしれない。これをチェックしてもらわなくちゃいけないと思います。

何度も繰り返しますけれども、いかにしてそれぞれの市町村の関係者にファクト、自分のところの事実を確認してもらって奮起してもらうしかないという感じですね。それをお節介だとか圧力を感じさせないようにして、うまく知らせる方法をちょっと工夫していただかなくてはいけないので、そういう工夫の仕方を、次の会議までにという時間がかかるので、2週間ぐらいしたら、ペーパーをそれぞれに渡してください。どういう工夫が可能なのか。それぞれ、ちょっと意見を聴取してもらっておけば次の会議が速やかになるので、2点、宿題ですね。

今までの「3つの達成目標」の「読む・書く」「計算」の部分の課題は何だったのか。なぜ応用が利かないのか。そして、それぞれの市町村が、特に埼玉県全体の平均以下のところなんかに、何らかの形で熱心に取り組んでいただくような仕掛けをしなくちゃいけないですね。

○高木委員長 1点、質問してよろしいですか。それぞれ義務教育課程の中で、PTAがやっぱりあるわけですね。私もPTAをやっていた経験があるんですけども、実は自分の子供の学力は分かるのですが、学校の学力はどうなんだろうということを考えるとき、私の経験だと、おそらく自分の子供が通っている学校の全体的な位置というのは分からないんですね。

分からないから、それでいいなら、それでいっちゃうんですが、でも、実はこういうふうに数字をとらえたときに、少なくとも校長、それから教育長が知っているとしても、首長さんは知っているとしても、保護者の人たちが、どの辺の位置にいるんだろうぐらいのことが分かるような環境を作っていないと、地域一体となった教育ができないような気もするんですね。

その辺、果たして県の教育委員会がそこにかかわれるのかどうかというのはちょっと分からないんですが、そんなところはどうなんでしょう。

○上田知事 まあ、一番早道だけどね、全部分からせると。そのかわり、えらい騒ぎになっちゃうけど。いろいろ難しい人たちも多いもんで。

○高木委員長 そうですね。意識というか、冷たい風に当たると涼しさを感じたり、寒く感じたりするのと同じように、少し自分たちの今の立ち位置がどうなのかなというのが分かるだけでも、もう少し頑張ろうとか、今やっているのをもっと伸ばしていこうというアクションができるような気がするんですね。ただ、それをバツと出せないのが非常に難しいところで、その辺は大変だなという気がしているんですが。

○上田知事 出さないことが抑制になっているんですね、文科省としてはね。

○関根教育長 全国のものは、基本的に我々はノータッチになっています。市町村と国との約束です。

○上田知事 そうですね。我々、知っていても、勝手にそれを発表している知事とかいますけれども、あれは約束違反で困るんだよね。

○関根教育長 そういう制度になっていません。

○上田知事 ただ、何らかの形で促すことを考えなくちゃいけないよな。どうしたら促せ



るか。お節介に見えずに。だって、そこそこでき上がって高校まで来てくれないと、高校になって「 $100 \div 4 =$ 」とってウーンとうなっているような人じゃ困るからね。もう小学校5年ぐらいの 때가、数字的には桁では一番多いですからね。ほとんど高校ぐらいになったら、数字は3桁ぐらいですからね。そうでしょう。3桁ぐらいですよ。3桁ぐらいは、みんな暗算のできるぐらいにならなくちゃいけないですよ。

でも、「 $100 \div 4$ 」でもウーンと唸っている人いますから、時々。小学生の頃に、まともにそういう暗算をしたことがないですよ。それが数学になったり国語になったりするわけですよ。やっぱり、それは困るんだよね。

○志賀委員 やはり小学校の教育は、すごく大切な部分だというのは私も感じています。保護者の方、PTAの方って、もちろん自分の子供ができることを望むんですが、どういうふうにかかわって、どういうふうに教えて、どういうふうにすればいいのか、習い事とかすべて含めて、とても悩んでいらっしゃる方が多くて、本当は先生にとっても相談したいんですけども、なかなかそういう機会もなく、相談できないでいるというのが現状だと思うんですね。

例えば、子供とのかかわり方のポイントって、親の協力がないと家庭学習はもちろん身に付かないし、先生と親、両方から、子供のやれるような環境を整えるためにも、私はマニュアルは嫌いなんですけれども、例えば大ざっぱのマニュアルを提示するとか、パターンとかね。

実は私、働くお母さんのための講座とかいうので、本当にポイント、ポイントを押さえる資料を作ったら、非常にお母さん方から「欲しい」というふうに連絡をいただいて、マニュアルって嫌いだけれども、やっぱり何か軸になるマニュアルがないと、今の保護者というのは、かかわりにくいのかなというのを少し感じていまして、マニュアルでなくても、指標みたいな何か提示できる部分があってもいいのかなということを私自身の中で考えてはいるんですが。

○藤崎委員 最近感じるのは、先生方が研修嫌いになっている傾向があるのではないかとことです。

でも、本当に必要な、面白い研修であれば、それが日々の教育活動に役に立つ実際的な研修であれば、先生方も学ぶことが面白くなってくる。例えば発達障害の子供、学習障害の子供の指導の仕方は、きちんと学べば、これは全ての子供に有効になって生きていくわけですから、先生の対応の仕方にゆとりが生まれる上質な研修というものをしていってほ

しいと思います。やはり忙しい先生たちを集めて行う価値があるかどうか、研修に関しては内容を精査していくということも、県として求められていくのではないかなと思うんですね。

実際、子供を見ていますと、高校生ぐらいでも、本当に会話が面白くて、この子はすごいと思った子の学力が低かったりした時に、やはり惜しまれるわけです。もちろん、その時から頑張ればいいのですけれども、センスのある子供を、義務教育段階で伸ばすことができていなかったとすれば大変残念なことではないかと思います。

○上田知事 あまり義務教育でやっているのと、そのセンスが伸びなくなるんじゃないですか。そういうのもあるんじゃないですか。

○藤崎委員 ただ、現場を回っていますと、まだまだ発達障害の傾向がある子供に対する学習指導法というのは浸透していないなど。ただ、やみくもに叱ってしまうとかですね。子供が分かっていないのに叱り続けてしまうというとか、あるいは教室の環境ですとか、黒板の周りにあまりいろんなものを置かないだとか、そういった基本的なことが、まだまだ浸透していない。

保育園や幼稚園の先生方のほうが、今、埼玉県では研修を受けていますから、浸透しつつあるかもしれませんので、そこは県として、多いにやれる余地があるのではないかと思います。

○上田知事 時間になりましたので、議論は一旦打ち切りますが、どうしても教育の関係だと、小・中とか幼児教育まで全部含めてくるので、議論が拡散してきます。やっぱり高校レベルの教育に絞り込みながら、皆さんの知見を、小・中学校も含めた形で入れ込まなくちゃいけないんですが、そっちの方は、どちらかというとも高校に役立つ形での仕組みを市町村にお願いをするとか、あるいは何らかの形で自覚を促す指標の工夫をするとかいう形でしか持っていけない部分があるので、そこを念頭に置きながら、今後、議論を進めていきたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

いくつか宿題を出させていただきました。特に問題は、埼玉県の一人一人の学力や、いわゆる個性を伸ばすためにはどうすればいいかという形が目標になっています。その上で、過去のをどう評価するかということに対して、ちょっと検証しづらい部分もありますので、検証しやすいような状況のデータを用意していただかないと、議論も思いの部分だけです。できるだけデータを中心にした議論にもっていくような工夫も、事務方はちゃんと用意してもらいたいと思います。

そうしないと、まとまらずに、意見は言って、いい意見はあったけれども、結論に至らなかったという話になってしまいます。結論までいなくても、できるだけ結論じみた形成だけはしておきたいと思っておりますので、今後の運び方についても理解してください。

前回の総合教育会議のほうは、理念をつくるために、少しざっくりばらんな議論をさせていただき、そのことがよかったわけですけれども、今回からは、一つ一つ形をつくるためにはどうすればいいか、というところに力点を置いてやっていかなくちゃいけないということを少し意識していただければと思っておりますので、よろしく願いいたします。

以上です。

○関根教育長 知事から宿題をいただきましたので、データ等、整理させていただいて、また次に進めたいと思います。

それでは、以上をもちまして、平成28年度第1回埼玉県総合教育会議を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

閉 会